workshop

売上アップのための 直売所出荷 ワークショップ

キャベツ

タキイ研究農場
戸丸（とまる） 祐貴（ゆうき）

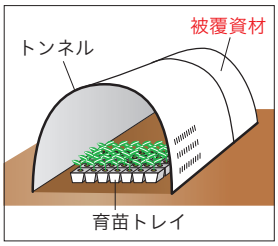
栽培基礎講座

播種

発芽適温は15～20℃です。夏まきでは高温による発芽不良が生じる場合があります。育苗に白色トレイを使うとトレイ内部の地温上昇を軽減できます。また、播種後1～2日は風通しのよい日陰や軒下などで発芽を促します。そのほかに「タキイホワイトTWシリーズ」など被覆資材を使った遮光を行えば、地温上昇による育苗リスクを軽減できます。逆に低温期の播種の場合は温床マットなどを使って地温を維持します。

育苗

葉が厚く、ガッチリとした健全な均一苗の育苗を目指します。潅水を行う時間と量がポイントです。潅水量は夕方に表面が多少乾くくらいを目安にして、午前中から正午に行い、極端に乾かない限り午後の潅水は控えます。また、少なくとも定植1週間前には、外気にあてて順化します。



↑夏まきでは高温を避けるために、「タキイホワイトTWシリーズ」などの被覆資材を使って遮光を行う。

圃場（ほ）の準備

キャベツの栽培には排水性、通気性が必要になるため、深耕をして畝を立てます。元肥は目標とする収穫時期によって、施肥量を変えます。年内どりでは全チッソ成分量の3分の2（10㎡当たり125g）、冬・春どりでは2分の1（10㎡当たり100g）が目安になります。リンやカリも同様です。

根こぶ病が発生する畑では、土壌殺菌剤を混和して防除に努めます。近年はゲリラ豪雨や長雨によって土壌中の酸素が不足することがあるため、あらかじめ酸素供給剤「オキソパワー5」を混和しておくことも有効です。

また、前作に緑肥を作付けすることで、土壌改良を行うことができます。5月に「緑肥用ソルゴー」をまいて、畝立ての1カ月前までに石灰チッソとともに鋤（すき）込むことで、圃場に有機物を投入することができます。冷涼地で夏秋どり栽培をする場合は、早春まきが可能なえん麦やらい麦を用います。

↑高畝にして排水をよくする。通気性が心配な場合は酸素供給剤「オキソパワー5」を混和しておくことで土壌中の酸素不足を防ぐことができる。

栽培管理

追肥は、定植後15日、30日を目安に行います。キャベツの栽培は初期生育が重要なため、その時期に肥料が切れて、生育が緩慢にならないように気をつけます。2条栽培であれば、1回目に畝の床面中央に肥料を施してから中耕し、株元に土を寄せます。2回目は通路に肥料を施し、中耕と土寄せを行います。どちらのタイミングも肥料が混和された土を、根の近くに土寄せするように意識しましょう。また、中耕は、除草や土の通気性改善も期待できます。生育日数の長い冬どり作型については、葉色や外葉の張り方を見ながら1～2回追加し、肥料切れを起こさないよう生育を進めます。

病害対策では、黒腐病（くろぐされ）に注意が必要です。葉の縁からV字形に枯れてくる症状が出ていれば、黒腐病です。雨がたくさん降ったときや強風にあったときに、発生しやすくなります。黒腐病は細菌による病害です。無機銅系あるいは抗生物質系の農薬を散布し予防します。

資材を活用して しおれに対処

「タキイ トレエース」のすすめ

猛暑日が当たり前の日本の夏。秋どりのキャベツでは、暑い時期に定植するため、定植後にしおれてしまうことがあります。「タキイ トレエース」を用いることで、しおれ被害が軽減され、初期生育を順調に進めることができます。定植1～2日前に潅注し、定植1週間後以降に葉面散布をします。しおれ軽減だけでなく、鮮度保持や、霜害対策にも有効です。さまざまな野菜に使える資材ですので、ぜひ一度ご活用ください。

↑天然に存在する糖質トレハロースの保水効果で、蒸散を抑制させるとともに、乾燥後の植物細胞やたんぱく質の状態を安定させる。

ブリーダーこれがおすすめ！

秋種ワークショップ▶キャベツ

直売所これが定番品種

「初秋（しょしゅう）」は抜群の耐暑性があり、秋どりキャベツでは最も早く収穫できる極早生種です。この品種の特長は何といっても食味のよさで、非常にやわらかく、サラダ向けにおすすめです。

糖度が高く、冬場のおいしいキャベツの定番は「彩音（あやね）」です。耐寒性・低温結球性が強く、玉肥大にすぐれます。吸肥力が強いため、追肥主体の管理を心掛けてください。

「春波（はるなみ）」はジューシーな食感を特長とする鮮緑色のキャベツです。肥大性、形状安定性ともによく、色つやにすぐれます。播種期幅が広く、それぞれの収穫シーズンで楽しめます。

「レンヌ」は玉肥大にすぐれる早生のグリーンボールです。玉は丸いボール形なので、直売所でもお客さまの目を引くでしょう。色つやがよく、肉質もやわらかくて食味良好なおすすめ品種です。

↑抜群の耐暑性をもつ「初秋」。

↑糖度が高く、冬場のおいしいキャベツ「彩音」。

→ジューシーな食感が特長、鮮緑色の「春波」。

↑丸いボール形が目を引く「レンヌ」。

レストラン、シェフに向けてはこの品種

キャベツといえば緑色をイメージしますが、「ルビーボールSP（エスピー）」はポリフェノールの一種であるアントシアニンを蓄積することによって、赤紫色になるレッドキャベツです。鮮やかな色が食卓を彩ります。葉は少し厚いですが、オリーブオイルなどであえてマリネにすると食べやすく、おいしく食べられます。

「ルビーボールSP」は定植後約65日で収穫できる極早生種で、耐暑性があるため、夏まきでも作りやすい品種です。株張りがコンパクトなため、肥料切れに注意して栽培することで、よい玉が収穫できます。排水の悪い圃場では、根張りが悪くなることがあるので、高畝にし、中耕をこまめに行うことがポイントです。

野菜の王様ともいわれるケールは、近年の健康志向で、その注目度が高まってきています。ケールの仲間であるコラード「ハイクロップ」はビタミンやミネラル、食物繊維などを多く含む品種で、青汁はもちろん、肉と一緒に炒め物などにするととてもおいしく食べられます。耐暑性、耐寒性にすぐれるため、環境を選ばず栽培することができます。外葉が30cm程度になったら収穫のタイミングで、下の葉から収穫します。長期間収穫するためには、定期的に追肥を行って、草勢を維持することがポイントです。

←赤キャベツの代表品種「ルビーボールSP」。おいしくて食卓の演出にも最適。

↑「ハイクロップ」は生育旺盛で非結球のため栽培適期が長く、育てやすい。青汁としても、加熱料理でもおいしい。

workshop

売上アップのための 直売所出荷 ワークショップ

ハクサイ
タキイ長野研究農場
近藤 英郎

栽培基礎講座

播種

品種ごとの播種日を厳守します。播種適期より早まきすると、軟腐病・菌核病などの病害が発生したり、外葉ばかりが多くなり結球体制に入るのが遅くなったりします。逆に遅まきすると、株張りが悪くなり結球しても小玉になり、さらには不結球になる場合もあります。

↑定植適期の若苗。根鉢が崩れず、根張りもほどよい。

育苗

ハウス内で育苗する場合は、定植の3日以上前から屋外に苗を移動して順化し、強い光と風、気温の日較差を利用してがっちりとした苗に仕上げます。順化する際には、苗を「サンサンネット」でトンネル被覆して、強い雨に打たれないようにします。

定植

若苗定植すると早期に活着して生育初期に根が深く入り、乾燥条件でも水分を吸いやすくなります。ほどよく根が張って苗を抜いても根鉢が崩れないようになれば、定植適期の若苗です。根が回った老化苗を定植すると、活着不良を起こしやすくなるので注意します。また、定植後は十分に潅水し、苗が活着するまでは乾燥に注意します。

↑追肥は品種に合わせ、株の生育状況を見ながら行う。

肥培管理

早生種・中早生種は、早い時期に結球体制に入るので、元肥主力の施肥設計で初期から旺盛な生育を促します。草勢の強い中生・中晩生種は多肥にすると、株が大きくなりすぎます。元肥を抑え、追肥を数回に分けて行うことで肥効を持続し、じっくり肥大と玉じまりを進めます。

1回目の追肥は、活着して新しい根が伸び始めるころの定植後7～10日目に行います。10㎡当たりチッソ成分量で30g程度の速効性の化成肥料を条間に施します。その際、除草を兼ねて畝の表面を軽く耕して中耕をします。

↑厳寒期収穫では、球頭部を軽く縛り寒さ傷みを防ぐ。

2回目の追肥は、生育状況を見ながら結球が始まるころに行います。

結束・収穫

厳寒期に収穫する場合は、寒さ傷みを防ぐために、球頭部をひもなどで縛る結束作業を行います。霜に2～3回あたり、外葉がしんなりとやわらかくなったときが、結束のタイミングです。

栽培Q&A

Q ゴマ症・縁腐れ・芯割れを減らすには？

A これらの生理障害は、生育がごく旺盛なときに発生しやすく、その原因は**①土壌のチッソ過多、②高温、③過熟**です。

〈対策〉

①チッソ過多

化成肥料だけではなく、堆肥も含めてチッソ施肥量を計算し、過剰にならないように適量の施肥を行います。

②高温

温暖化で秋の気温が高くなってきているので、天候を見計らい、播種期を遅らせてじっくりと生育するようにします。遅い時期に定植を行う場合には、老化苗定植は厳禁とし、必ず若苗定植を行ってください。

③過熟

収穫遅れは過熟や老化を引き起こすので、適期収穫を心掛けます。

ブリーダーこれがおすすめ！

秋種ワークショップ▶ハクサイ

直売所これが定番品種

「きらぼし」シリーズは、幅広い根こぶ病に強く作りやすいうえ、肉質がやわらかくおいしいハクサイなので、直売所出荷におすすめです。

中間地・暖地向けでは、「きらぼし77」年内どり、「きらぼし85」12月～１月どり、「きらぼし90」１～２月どりの３品種のローテーションで連続して安定出荷ができます。冷涼地９～10月どりでは「きらぼし65」を栽培します。

→「きらぼし85」。「きらぼし」シリーズを組み合わせて大玉ハクサイのリレー収穫も可能。

売上アップにはこの品種

「オレンジクイン」は球内色が鮮やかなオレンジ色で、食感がパリッとしており甘くておいしい品種です。栄養価の面では、通常のハクサイに含まれるβ（ベータ）－カロテンに加え、トマトに含まれる抗酸化成分の一種であるシスリコピンを含んでいます。見ためのきれいさ・味・栄養面と、多方面からアピールできる品種です。「オレンジクイン」は外見では通常のハクサイと区別しづらいので、タキイＨＰ内の「販売支援ツール」にあるＰＯＰなどを利用して販売しましょう。

←タキイＨＰでダウンロードできる「オレンジクイン」のＰＯＰ。

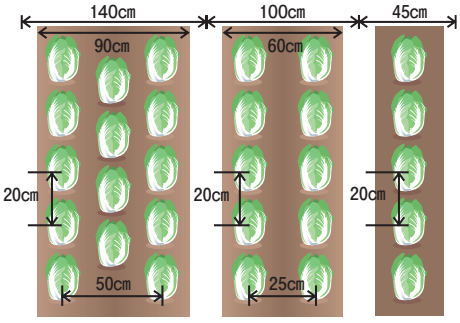
↑従来ハクサイにはないシスリコピンを含む「オレンジクイン」。

ミニハクサイ「CR（シーアール）お黄（き）にいり」の栽培ポイント

- ミニハクサイとして600～700ｇの玉を収穫するには、条間・株間は20～25cmを標準とします（**図**）。
- 元肥主力の施肥設計とし、元肥量は大玉品種より３割程度減肥した量を目安とします。
- 早生種であり収穫適期幅が短くなる傾向にありますので、出荷量を考慮した計画的な作付けを行い、８分結球から収穫を始め、過熟になる前に収穫を終えるようにします。

↑「CRお黄にいり」は使い切りサイズで、冷蔵庫の野菜室にもぴったりと収まる。

図「CRお黄にいり」の栽植密度



例①　10,700株／10ａ
例②　10,000株／10ａ
例③　11,100株／10ａ

よくある失敗　結球不足

ハクサイが結球するには、生育初期に葉が十分に生育する必要があり、適湿時に畝立て・定植することが重要ポイントの一つです。よくある失敗は、大雨の後に土壌が水分を多く含んだ状態で畝立てをし、ゴロ（土塊）が多くなってしまい、定植しても初期生育が順調にいかないことです。大雨の後には畑が乾くのを待って、土を握って塊ができ、その塊を指で突くとほぐれるような土壌適湿条件で畝立てをします。

←結球不足になってしまったハクサイ。生育初期に葉枚数を十分確保することが重要。

根こぶ病対策のポイント

- 幅広い根こぶ病耐病性をもつ「きらぼし」シリーズなどの品種を栽培します。
- 根こぶ病の休眠胞子の混入した床土で育苗した苗は伝染経路となりますので、「タキイセル培土」などの清潔な培土で育苗を行います。
- 酸性土で発生し、中性からアルカリ性の土壌では発生が減少しますので、石灰を施用して土壌pHを６.５以上に矯正します。

↑「タキイセル培土」。清潔な培土で伝染経路をしっかりと断つ。

workshop

売上アップのための直売所出荷ワークショップ

ホウレンソウ

タキイ長沼研究農場
神田　拓也

栽培基礎講座

排水・保水のよい土づくり

ホウレンソウは直根性が強いため、耕土が深く排水性と保水性のよい圃場が適します。タネまきの1カ月前までに堆肥を施し、有機質に富んだフカフカの土づくりを心掛けましょう。ホウレンソウは過湿に弱い作物なので、水はけの悪い畑では高畝にし、排水のよい畑を準備しましょう。

タネまき～水管理～

発芽をきれいにそろえることが良作へのポイントです。そのため、発芽まで適湿に土壌を管理しましょう。圃場が過度に乾燥している場合はあらかじめ潅水を行ってから整地します。

また、乾きムラが出ないようできるだけ凸凹のない播種床をつくり、播種後は均一に覆土・鎮圧をします。播種後の潅水は表面に水が浮かない程度に十分行い、表面が乾くようであれば適宜潅水し、発芽まで適湿を保ちます。

高温期の潅水ポイントは、立枯れ病防止のため発芽後、本葉4枚まで潅水を控えます。

↑発芽がきれいにそろうポイントは、潅水を行い適湿に土壌を管理すること。

タネまき～温度管理～

発芽をそろえるもう一つのポイントは適切な温度管理です。最適発芽温度は20℃ですが、30℃を超えるようだと発芽不良を起こしてしまうので注意が必要です。逆に低すぎても発芽まで時間がかかり発芽ぞろいも悪くなります。高温期の播種には遮光資材の「タキイ涼感ホワイト」や「アイスマルチ」で地温を抑制し、低温期の播種には「テクテク」のような不織布のベタがけで地温を確保すれば発芽ぞろいが向上します。

↑低温期の栽培では、不織布のベタがけで地温の確保に努める。

適切な肥培管理

見た目にもおいしい色つやのあるホウレンソウを収穫するために、適切な肥培管理で生育後半の肥切れを防ぎましょう。年内収穫の場合、10㎡当たりチッソ成分で200g、生育期間の長い1～2月どりでは250gを目安に施します。

地力の低い圃場では、本葉4枚展開したころに10㎡当たりチッソ成分で30g程度の速効性化成肥料を条間に追肥し、生育を順調に進めましょう。

↑色ツヤのあるホウレンソウを収穫するためにも、適切な肥培管理を。

収穫

ホウレンソウの適期収穫は25㎝前後です。収穫遅れになることが多いので、一度にタネをまかず、必要分だけ時期をずらしてまく「段まき」をすると安定して収穫ができます。

栽培Q&A

Q ホウレンソウで注意すべき病害はありますか？

A べと病はホウレンソウの最も重要な病害です。病原菌は糸状菌（かび）で平均気温が8～18℃の、葉裏に水滴がつくような多湿条件下で最も発病しやすくなります。春および秋季のべと病被害の多い時期には抵抗性品種を使用することで予防してください。チッソ過多や密植栽培は被害を助長するので注意が必要です。また、発生初期からの防除を徹底してください。風で胞子が拡散しますので発病した株は速やかに処分します。

↑「福兵衛」（写真）「伸兵衛」「タフスカイ」は多収性と作業性を両立したべと病抵抗性品種。3品種を組み合わせることで、周年栽培が可能になる。

ブリーダーこれがおすすめ！

秋種ワークショップ▶ホウレンソウ

直売所これが定番品種

「牛若丸」は、安定して長期間出荷するための定番品種としておすすめです。大葉で軸がよく太るため、ボリューム抜群な多収型ホウレンソウです。草勢が強く栽培容易で、秋～初春まで幅広い時期での栽培が可能です。葉色が濃いため、お客さまの目を引きます。

「オーライ」は生育が旺盛で、土質を選ばず幅広い作型に適応するため、とにかく栽培が容易なロングセラー品種です。葉が肉厚でやわらかいため、ベーコンとの炒め物やお浸しにしておいしくいただけます。

↑「牛若丸」は株張りのよい秋冬どり多収種。

売上アップにはこの品種

「冬ごのみ」は食味を追求したおいしいホウレンソウです。一番の特長は、ホウレンソウ特有のアクがごく少なく、甘みが強いので野菜が苦手な子どもでもおいしく食べられます。葉に深い切れ込みが入り、直売所での差別化もできます。サラダや鍋にサッとくぐらせて食べるのがおすすめです。

「弁天丸」は、ホウレンソウ唯一のファイトリッチ品種です。低温下の栽培で甘みを蓄積させるため冬どり栽培に最適です。また機能性成分ルテインが従来のホウレンソウより豊富で、葉色が濃くてりがあるため荷姿の美しさも目を引くポイントです。

↑「弁天丸」の常夜鍋。豚肉と合わせることで、脂溶性のルテインの吸収率がアップする。

夏季栽培を安定させるポイント

①遮光資材の活用

いかに地温を下げられるかが成功のカギです。ただし、遮光率が高い資材のかけっぱなしは軟弱徒長につながるので注意が必要です。

②適切な潅水管理

潅水をしないと株は大きく育ちません。しかし夏場の日中に潅水すると葉が焼けてしまいます。地面が乾いてきたら気温の低い朝方に潅水するようにしましょう。

③暑さに強い品種の利用

夏向けに改良されてきた品種を使いましょう。「タフスカイ」は暑さにも土壌病害にも強いため、夏場の栽培に最適です。

↑耐暑性にすぐれ高温期の夏～秋どりに適する「タフスカイ」。

夏場に向くホウレンソウ以外の葉物

ホウレンソウは元々暑さに弱く、近年の酷暑で栽培がさらに難しくなってきています。コマツナは比較的暑さに強く、夏まきだと25日程度で収穫できるのが魅力です。「菜々美」は春～秋まで幅広くまける多収種で夏場に向く品種です。夏場は虫がつきやすいため、防虫ネットを活用し良品出荷を目指しましょう。

←コマツナ「菜々美」。高温期でもじっくり生育し、在圃性にすぐれる。葉はツヤのある長丸葉で荷姿も美しい。

↑夏場の栄養補給にピッタリのコマツナのスムージー。

失敗しない 寒じめ栽培！

10月中旬ごろにタネまきをし、年末までに草丈20cmまで生育を進めます。その後低温に２～３週間さらすと、根からの水分給水量が減少し、糖やルテインなどの体内成分量が上昇します。甘みがぐっと増したホウレンソウで差別化し売上アップにつなげてください。

←２～３週間、低温にさらす寒じめ栽培。甘みがぐっと増したホウレンソウは格別です。

workshop

売上アップのための 直売所出荷 ワークショップ

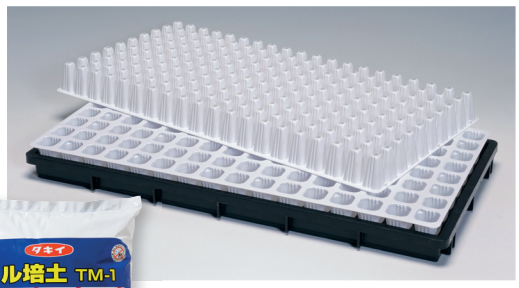
レタス類

タキイ種苗
新井 真琴

栽培基礎講座

播種・育苗

200穴の「根巻防止セルトレイM型」(白色)に「タキイセル培土TM－1」などの園芸用培養土を入れ、1粒ずつタネをまきます。少量の栽培であれば6cm程度のポリポットに2～3粒程度をまき、間引きして育苗するのもよいでしょう。レタスの種子は光を好むため、タネがわずかに隠れる程度に薄く覆土し、発芽まで土の表面が乾かないように注意します。発芽は20℃前後が適温で、25℃以上になると発芽率が低くなる場合があります。発芽するまでは風通しのよい日陰に置いてください。発芽後は徒長しやすいので、日当たり、風通しのよい場所に移して育苗します。



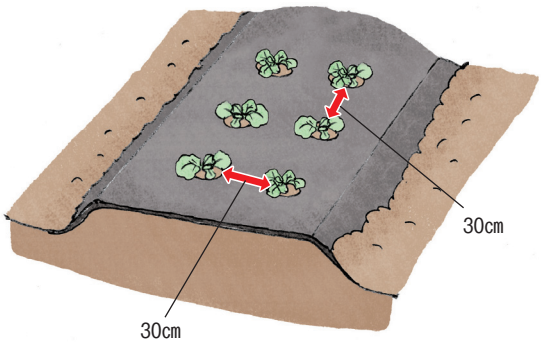
↑タキイオリジナル「根巻防止セルトレイM型」と「タキイセル培土TM－1」(左)。セルトレイは根巻き現象を抑制し、白色タイプは夏場の育苗でも地温が上がりにくい。

畑の準備・肥培管理

レタスは過湿な土壌を嫌う作物のため、堆肥の投与を積極的に行い、保水性と排水性にすぐれた土づくりに努めてください。水田の後作では、過湿による根傷みを避けるため、畝を高くすることが大切です。整地やマルチ張りは前もって計画的に行い、畝の中は適切な土壌水分を保ちましょう。元肥のチッソ成分は10㎡当たり100～150gを目安に、栽培期間の長い厳寒期どりでは200～250gと増量します。前作の残肥や土質などを考慮して調整してください。

定植

本葉が4～5枚になり、トレイやポットから抜いても根鉢が崩れず、ほどよく根がまわったころが定植時期の目安です。条間・株間はともに30cm程度の2～3条で、育苗の土がちょうど隠れるぐらいの深さで植えましょう。定植後は潅水を行いスムーズな活着を促します。



↑条間・株間30cm程度、2～3条で植えます。

病害防除

夏から秋にかけてはタバコガの幼虫やアブラムシなどが発生しやすいので、定植時には農薬登録のある粒剤をあらかじめ圃場に混和しておくとよいでしょう。台風など風雨で葉が傷んだ場合は、速やかに殺菌剤の薬剤散布を行ってください。

トンネル管理

レタスは結球が進んでくると、霜や寒さに弱くなります。11月以降の霜が降りる時期になってきたら、防寒や生育促進のためにビニールトンネルか不織布ベタがけで被覆をします。ビニールトンネルの場合、被覆直後は昼夜とも両すそ換気で霜害を防ぎ、結球前の外葉ができる時期は20～25℃、結球初期は20℃、肥大期は20～25℃を目標にします。

↑レタスは霜や寒さに弱い。11月以降はビニールトンネルか不織布ベタがけで被覆する。写真は「Jブレス」の不織布ベタがけ、両すそ換気の例。

収穫

玉レタスの収穫の目安は、玉を軽く押して弾力のある状態が適期です。中が詰まりすぎて過熟になると苦みが増してしまうため、取り遅れないよう早めの収穫を心掛けます。

ブリーダーこれがおすすめ！

秋種ワークショップ▶レタス

直売所出荷これが定番品種

夏：「**サウザー**」は気温が高い時期の栽培に適し、結球性にすぐれています。トウ立ちが遅く、変形球の発生も少ないので、幅広い作型で作りやすい品種です。

冬：「**バークレー**」は玉太りのよい早生種で、年内や早春どりの作型に栽培しやすい品種です。食感は歯切れがよく、みずみずしさがあり、特に食味のよいことが特長です。

「**レガシー**」は、草勢旺盛で耐寒性にすぐれる品種で、９～10月まきでトンネル被覆をして１～３月にかけて収穫できます。比較的ゆるやかに結球し、大玉に仕上がります。

↑「サウザー」は初夏～秋どりに適しており変形球の発生も少なく作りやすい。肉質も厚めで日もちもよい。

→「バークレー」は低温期の玉太りがよく、歯切れのよい食感とみずみずしさが特長だ。

↑耐寒性にすぐれ、形のよい大玉、多収が期待できる「レガシー」。

売上アップにはこの品種

ロメインレタスは玉レタスと比べ、葉に厚みがあり食べごたえのある食感で、ほのかな甘みと苦みがあります。ハクサイに似た形をしており、「シーザーサラダ」に使われるレタスです。肉厚で炒め物にも適します。

春～初夏どり、秋～晩秋どりの、より低温肥大性が求められる作型では「**ロマリア**」が適します。収穫時には頭の部分が軽く結球し、中の葉がやわらかくなり甘みが増します。気温が高い夏どり、秋どりの作型には晩抽性と耐暑性がすぐれる「**晩抽ロマリア**」をおすすめします。葉の枚数が多く、肉厚でパリッとした食感になります。

↑春～初夏どり、秋～晩秋どりには「ロマリア」。甘みと苦みのバランスがよい。

↑気温が高い夏どり、秋どりには「晩抽ロマリア」。肉厚でパリッとした食感。

大人の味わい「ワインドレス」の栽培ポイント

「**ワインドレス**」は鮮やかなワインレッドの葉の色が特徴的なリーフレタスで、緑が主体の直売所の野菜売り場をとても華やかにしてくれます。コンパクトな草姿のため、プランターなどの小面積でも栽培が可能です。

トウ立ちは比較的早い品種ですから、高温期の栽培は避け、適温期から低温期の作型で栽培を行うようにしてください。また、発色をよくする栽培ポイントは、株間を広めにとり、日光がよく当たり通風をよくすることが重要です。

←「ワインドレス」。株間は広めにとる。日当たり、風通しをよくすることがポイント。

栽培Q&A

Q レタス栽培でマルチ活用のコツは？

A **作型によってマルチの色を使い分けることです。**

レタスは温度や水分の急激な変化に敏感な品目です。マルチを利用することで土壌の湿度や温度の変化が緩やかになり、土のはね返りを防止することもでき、レタスを安定的に栽培することができます。

秋や冬の適温～低温期には黒マルチや緑マルチを使い地温を確保することで、生育が促進されます。一方、白マルチは光の反射性が高く、地温を抑制する効果があるため、10月どりなどの高温期に適します。ほかにも、銀色マルチはアブラムシやアザミウマの防虫効果が高く高温期の栽培に適します。

↑作型によって白マルチ、黒マルチなどを使い分けることが上作につながる。

workshop

売上アップのための直売所出荷ワークショップ

ダイコン

タキイ茨城研究農場
岡本 祐

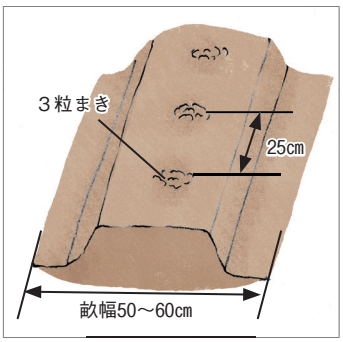
栽培基礎講座

畑の準備

「大根十耕」と言われるように、耕土がやわらかく、排水性と保水性のよい畑が適します。まずは播種1カ月前に完熟堆肥を10㎡当たり20～30kg、pHの調整に苦土石灰を10㎡当たり0・8～1・5kg施用し、よく混ぜて土になじませておきます。

元肥は化成肥料を10㎡当たりチッソ成分で100～150gとします。元肥をなじませるため、播種1週間前には畝立てします。ただし、極端な過湿・乾燥条件のときに行うと、栽培期間中に土がしまり生育不良につながるので注意が必要です。土壌の適湿な状態は、手のひらいっぱいの土を、握れば固まり指で軽く押すと崩れる程度のかたさです。

畝の高さは約10㎝、水はけが悪い畑では約20㎝とします。畝幅は1条栽培なら50～60㎝、2条栽培なら120～130㎝が目安です。



↑畝の高さは約10㎝、1条栽培なら畝幅は50～60㎝とします。

↑本葉2～3枚目ごろに1カ所に2株、本葉4～5枚目ごろに1カ所に1株に間引く。

↑隣の株と葉が重なるまでは、中耕をこまめに行うことで根の生育を助ける。

↑抽根部の太さ7～8㎝が収穫の目安になる。

播種

むやみな早まきは病虫害の助長、逆に遅まきは厳寒期の肥大不足につながるので、品種に合った播種適期を遵守してください。また、栽植密度は2条栽培の場合は条間を35～40㎝とし、株間は25㎝を基準とします。

播種穴の深さは1・5～2㎝とし、1穴に3粒まきます。3粒まきすることで株同士が支え合い、大雨などの過酷な気象条件による生育への影響を最小限にとどめます。3～5日で発芽し、発芽後本葉が出るまでは乾燥させないよう、こまめに潅水しましょう。

間引き・追肥・中耕

間引きは本葉2～3枚ごろに1カ所に2株、本葉4～5枚ごろに1カ所に1株にします。追肥は1株にしたタイミングで化成肥料を10㎡当たりチッソ成分で50～60gを畝間もしくは条間に施用し、その後中耕することで土と肥料をよくなじませます。

中耕することにより、土壌表面のかたい層が砕かれやわらかくなり、根への酸素供給と雑草の抑制効果につながります。追肥のタイミングではもちろんですが、隣の株と葉が重なるまでは中耕をこまめに行うことで、根の生育を助けます。こまめに行ってください。

収穫

収穫の目安は秋の適期まきで播種後約60日、抽根部の太さが7～8㎝程度を目安とします。また、播種日によって栽培日数は前後しますので、9月中旬まきの栽培日数を基準に、生育を見ながら収穫を行ってください。

栽培Q&A

Q 春ダイコンの被覆資材を取り除くタイミングを教えてください。

A トンネルビニールやベタがけはサクラが咲くころを目安に取り除きます。遅れると地上部の生育が旺盛になり、曲がりの発生や抽苔を助長することになります。トンネル栽培の場合は、3月下旬ごろから徐々に換気を強め、日中のトンネル内温度を徐々に外気温に近づけます(これを順化といいます)。ベタがけ栽培の場合、順化の必要はありません。サクラの開花時期(中間地3月下旬～4月上旬)は寒さも残り寒暖の差があるため、曇りの日や気温が穏やかな日に取り除きましょう。

↑被覆資材はサクラが咲くころを目安に取り除く。

ブリーダーこれがおすすめ！

秋種ワークショップ▶ダイコン

直売所これが定番品種

まずは見た目や味が極上の定番品種で消費者の心をつかみましょう。

「ＹＲくらま」はナシのような甘みとみずみずしい肉質が特長です。生育旺盛で見た目のボリューム感と肌つやのよさでひときわ目を引きます。

「緑輝」は、「YRくらま」の弟分的な品種で、根長が30cm程度の短形青首種です。耕土が浅い畑に向いていますし、小さな世帯が多い都市近郊の直売所にも向いています。

どちらの品種も播種適期は９月中下旬で、無理な早まきや多肥栽培は割れにつながるため注意しましょう。

９月下旬～10月上旬まきでは「千都」がおすすめです。耐寒性と在圃性にすぐれるため、温かい地域では２月下旬まで収穫可能です。肉質は緻密で歯切れがよく、冬の寒さで甘みが増します。尻づまりがよい総太り型でそろいもよいため、２月まで安定して出荷できる良食味品種としてお使いください。

↑「ＹＲくらま」。肌つやのよさが店頭でも目を引く。

↑おいしい短めの青首種「緑輝」。

↑味よし、そろいよし、冬どりの「千都」。

売上アップにはこの品種

作りやすさとおいしさを兼ね備え、色の鮮やかさからひときわ目を引く赤丸二十日ダイコンの「ニューコメット」、ミニの赤ダイコン「紅三太」をおすすめします。「ニューコメット」は、「コメット」と比べて生育が早く球形によくそろう品種です。早生種で問題となる裂根の発生も少ないため作りやすく、葉がコンパクトで高温期でもむやみに葉伸びせず、プランターやトレイなどでも栽培が容易です。

「紅三太」は、晩抽性があるため長期出荷（秋冬どり、春～初夏どり）可能な品種です。適期栽培では播種後45日で収穫でき、葉がコンパクトなため、密植栽培にも適しています。ただし、収穫遅れは変形、裂根の原因になるため適期収穫を心掛けてください。

両品種とも、肉質はとてもみずみずしくシャキシャキとした食感で、特に彩りの少ない春の直売所でひときわ目を引く品種です。

↑「ニューコメット」(左)と「紅三太」(右)、どちらもみずみずしい食感で、春の直売所を鮮やかに彩ること間違いなし。

春どりダイコン、リレー出荷のすすめ

春どりダイコンのおすすめ品種として、低温時期でも安定して太り、肌つやと食味にすぐれる品種をご紹介します。

12月～１月中旬まきでは低温下での肥大性にすぐれ、肌つやのよさが特長の「春神楽」をおすすめします。

１月下旬～３月中旬まきでは、春ダイコンの中でも特に食味にすぐれ、みずみずしさと歯切れのよい肉質が特長の「つや風」がおすすめです。３月まきになれば「健白」も適します。青首種とは見た目が異なり差別化を図れます。

↑12月～１月中旬まきには４月どりの「春神楽」。

↑１月下旬～３月中旬まきには４月下旬～６月上旬どりの「つや風」。

↑３月下旬まきにはベタがけマルチ栽培で５月下旬どりの「健白」がおすすめ。

よくある失敗　葉は健全なのですが、ダイコンを切ったら根の中に空洞が入っていました。

空洞症と呼ばれるダイコンに見られる生理障害の一種で、生育の途中で根の中に空間ができてしまうものです。肥効が強く葉勝ちになったり、乾湿の差が出やすい畑で多く見られます。発生を防ぐには、ダイコンがスムーズに生育するための栽培管理が重要です。排水性、保水性のよい土づくりを心掛け、水はけの悪い畑では高畝(10cmを基準とし20cmまで)に、逆に水はけのよい畑では平畝にします。肥培管理では、特に生育旺盛な品種では元肥を通常より少なくして発生を防ぎます。

←空洞症と呼ばれるダイコンの生理障害。

workshop

売上アップのための 直売所出荷 ワークショップ

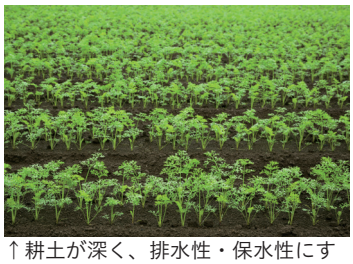
ニンジン

タキイ熊本研究農場
前田 匡夫

栽培基礎講座

畑の準備

よいニンジン作りには、よい畑の選定や畑づくりが欠かせません。望まれるのは耕土が深く、排水性・保水性にすぐれる畑です。有機質不足の畑では地面が固まりやすく、根がきれいに太れません。10㎡当たり20～30kg程度の堆肥を投入します。播種直前の投入はまた根の原因となるため、播種1カ月前までには行います。



↑耕土が深く、排水性・保水性にすぐれる畑づくりが欠かせない。

播種時期と品種選定

露地野菜の生育は天候の影響を受けやすく、特に根菜類の根の伸長・肥大は地温の影響が大きいため、適期播種を心掛けます。むやみな早まきや遅まきは根の生育不良を招くため避けます。春まきでは抽苔を回避するために、春まき可能な品種を選びます。

↑発芽がそろうまでは畑を乾燥させないこと。生ダネとペレット種子の扱いの違いにも注意。

肥培管理

夏まき栽培に必要な施肥量の目安は、10㎡当たりチッソ100～150g、リン酸150～200g、カリ100～150gです。このうち、元肥を7割、追肥を3割程度として、播種2週間前までに元肥を施用します。追肥は最終間引き後に行います。

↑ニンジンの生ダネ。播種の際は乾燥防止に鎮圧やマルチングを。

播種

ニンジン種子は小さく吸水力も低いので、均一な発芽のためには十分注意が必要です。播種溝の深さや覆土の厚さ、潅水が一定になるよう心掛けます。生ダネは株間1～2㎝程度で条まきに、ペレット種子は株間6～10㎝程度で各所に5～6粒を点まきします。

播種溝や播種穴の深さは、人差し指の先から第一関節までくらいです。覆土は種子が見えなくなる程度に行い、乾燥防止のためしっかりと鎮圧します。もみがらや敷きわらをかけると、強雨や乾燥対策になります。発芽がそろうまでは、畑が乾燥しないよう潅水を行います。

ペレット種子は播種作業が容易ですが、生ダネに比べ発芽に多くの水分が必要なので乾燥に注意します。

↑タネを核としてコーティングされたペレット種子。サイズが均一なため、機械や播種器が使用できる。

間引き

間引きは生育に合わせて行います。条まきでは本葉2～3枚で株間2～3㎝程度、肥大を開始する本葉5～6枚までに6～10㎝程度とします。点まきでも最終間引きまで2～3回に分けて間引きします。間引きが遅れると、根の肥大に影響するので気をつけます。間引き後は追肥を施し、中耕と株元への土寄せを行います。

↑間引き遅れは根の肥大に影響するため、こまめにタイミングよく。

収穫

収穫の目安は根重で150～200g程度です。収穫が遅れると割れや品質低下を招くので、適期収穫を心掛けます。

栽培Q&A

Q ニンジンの表面に見られる黒い斑点状の病気は何ですか？

A 病斑が円形または長円形の褐色水浸状となり、病斑中央に縦の亀裂が入る場合、しみ腐病を疑います。病原菌はかびの仲間で、過湿条件で発生が増加します。連作は病原菌の増加を招くため避けます。圃場の水はけが悪い場合、高畝栽培で過湿になりにくくすることで予防します。

ブリーダーこれがおすすめ！

秋種ワークショップ▶ニンジン

直売所これが定番品種

「向陽二号」は家庭菜園向けだけでなく、営利栽培向けとしても幅広く使われている大変作りやすい品種です。その理由は、土質を選ばず幅広い作型に適すること、しみ腐病に強いことがあげられます。

「恋ごころ」はやわらかい肉質で甘みに富むため、ジュースやサラダなどの生食用から惣菜加工用まで幅広い用途に向き、食味で差別化できるためおすすめです。これらの品種は春まきでの栽培も可能です。一般地の露地栽培では３月中旬ごろ、ベタがけ栽培では３月上旬ごろから栽培可能なので、幅広い時期に収穫・出荷が可能です。

↑作りやすさで人気の「向陽二号」。

↑幅広い用途に向く「恋ごころ」はジュース(左)にもおすすめ。

売上アップにはこの品種

「京くれない」はリコピンとカロテンを併せもつ赤色ニンジンです。肉質が緻密で煮くずれしにくいため、生食から加熱調理まで幅広く活用可能です。

「オランジェ」はフランス語で「オレンジ」を意味するように、外皮から芯まで濃いオレンジ色で、カロテンを従来品種の約1．5倍多く含みます。これらの品種は機能性にすぐれるファイトリッチ品種で、外観にも特徴があるため、従来品種と組み合わせることで注目を集められるでしょう。

↑赤色ニンジンの「京くれない」。

↑濃橙色でカロテン豊富な「オランジェ」。

↑左から、「京くれない」「向陽二号」「オランジェ」。同じニンジンでも色の違いが楽しめる。収穫時期の重なる３本をセットにし、「今夜のカレーはカラフルニンジン」とか「カラフルおでん」とかポップでPR。

栽培安定のおすすめ品種

秋冬どりのタネまき時期は夏場ですが、近年はゲリラ豪雨や異常高温の影響で、発芽をそろえることが難しくなりました。高温下では肩部がコケたり形状の乱れが生じ、秀品率の低下を招きます。

「翔馬」は発芽率と発芽勢が高く、肩部の形状安定性も高いため、夏場の早まき栽培での秀品性にすぐれます。外皮色、芯色ともに濃橙色で、肌のてりにすぐれる点もおすすめです。

なお、「翔馬」は種子の販売単位が１万粒と多くなりますので、直売所でグループ購入などして使用を検討されてはどうでしょうか。

→夏場の早まき栽培におすすめの「翔馬」。みずみずしい食感で臭みも少ない。

私のおすすめ

株間を変えて生育調整

株間は６～10cmが一般的ですが、意識して株間を変えることで生育を調整可能です。早く収穫したいときは広め、長期間収穫したいときは狭めにします。夏まきで播種を早めに行う場合、葉が強くできやすいので株間は広い方が根のそろいはよくなります。

workshop

売上アップのための直売所出荷ワークショップ

タマネギ

タキイ研究農場
坂本 和貴

栽培基礎講座

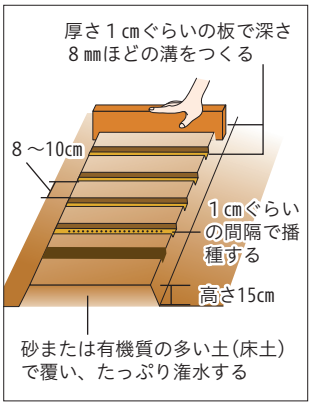
播種と育苗

タマネギの栽培は、まず均一で良質な苗作りからスタートします。

本圃10㎡分の栽培には、約0・5㎡の苗床が必要です。苗床は肥料を10㎡当たりチッソ成分で約70～100g施し、畝の高さは15㎝程度にします。

床面が平らになるように苗床を準備します。床面に起伏があると、覆土や水分にムラが生じやすく、発芽や生育に差が出やすくなります。播種は管理のしやすい条まきがおすすめです。深さ8㎜ほどの溝を8～10㎝間隔でつけ、タネを約1㎝間隔でまきます。

覆土は溝が埋まる程度とし、その上にもみ殻などの有機物を被せ、しっかり潅水します。特に、育苗初期は適湿を保つようていねいに潅水します。約1週間後に発芽してきますが、苗が込みあっているところは、本葉2枚目が見えるころまでに間引きし、間隔をそろえておきます。育苗期間は約55日、葉枚数3～4枚、長さ25㎝ほどの苗を目標にします。



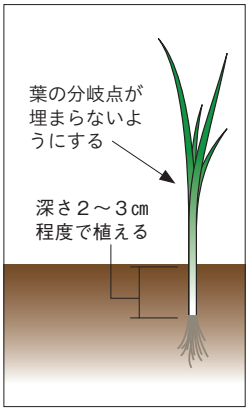
↑発芽そろいまでは乾燥させないように潅水に注意する。

定植・施肥管理

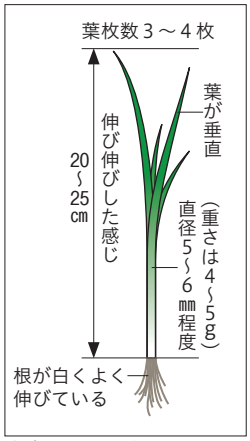
堆肥や緑肥などの有機物は、少なくとも定植の約1カ月前に施しておきます。栽培に必要な本圃の肥料は10㎡当たりチッソ成分で約200～250gです。極早生・早生種のような早期出荷用品種は、マルチ栽培で全量を元肥とします。貯蔵種を露地栽培する場合は、半分を元肥とし、残りを追肥として投入します。

苗とりでは、できるだけ根を切らないようにすることが、活着をよくするポイントです。定植は、葉の分岐点が埋まらないように、2～3㎝程度の深さで植えましょう。

年明けからの貯蔵種(中生・中晩生)の追肥は、1月上旬、2月上旬、3月上旬の3回に分けて行います。1月の追肥は、根張りを促進して葉数分化を促し、2月は低温期に肥効を高めてチッソ欠乏による抽苔を抑える効果があります。3月上旬は止め肥になります。多肥や止め肥の遅れは、食味や貯蔵性の低下、過繁茂による病害虫の発生にも影響しますので注意しましょう。



↑定植のポイントは葉の分岐点が埋まらないようにすること。



↑育苗期間は約55日、長さ20～25㎝の苗を目指す。

収穫・貯蔵

タマネギは収穫時期が近づくと、葉が徐々に倒伏します。全体の8割ほどが倒伏して、1週間後くらいの晴天日をねらって収穫しましょう。

1～2日ほど天日干しして十分に乾燥させ、雨の当たらない風通しのよい場所で、つり貯蔵やコンテナ貯蔵で保管します。

貯蔵中に発生する病害の多くは、圃場で感染したものです。収穫時の十分な乾燥に加えて、栽培中の圃場の排水対策や適切な施肥管理を行いましょう。

栽培Q&A

Q 育苗中に葉を切っても大丈夫ですか？

A 苗が旺盛に生育して、倒れて曲がってしまったり、過湿で病気になったりと、お困りのこともあるかと思います。そのような場合は、葉が倒れる前に長さ20㎝前後に切るとよいでしょう。一度に切る長さは5㎝程度とし、短く切りすぎないことに気を付けます。

切り口からの病気の感染を防ぐために、切り口が早く乾燥する晴天日の午前中に行いましょう。

定植時も、苗を持ちやすい長さに切っておくことでスムーズに植え付けを行うことができます。

↑葉が倒れる前に20㎝前後に切っておきます。定植時も、持ちやすい長さに切っておくとスムーズに植え付けできます。

ブリーダーこれがおすすめ！

秋種ワークショップ▶タマネギ

直売所これが定番品種

直売所向けには、中生の貯蔵種としては熟期が早く作りやすい「ターボ」がおすすめです。

梅雨入り前に収穫でき、玉太りもよい「ターボ」は、切り玉出荷と年内までの貯蔵出荷、どちらにも適した品種です。

貯蔵出荷をねらう場合には、密植によりかたくしまった中玉に仕上げることがポイントになります。

↑立性草姿で作りやすい「ターボ」。太りとそろいのよさが特長だ。

売上アップにはこの品種

「ケルたま」は機能性成分ケルセチンを秋まき従来品種に比べて約1．5倍多く含んでいる品種です。ケルセチンはポリフェノールの一種で、抗酸化作用、抗炎症作用、動脈硬化予防などの効果があることが報告されています。

玉のしまりがよく、皮は密着性にすぐれており、濃赤褐色で美しく仕上がります。貯蔵中の萌芽や尻部の動きが遅く、３月までの長期貯蔵が可能です。

中生種と同様、９月中下旬に播種し、11月中下旬までには定植（中間地標準）、スムーズな活着を図ります。

収穫時期は晩生の６月中旬ごろとなりますので、梅雨の晴れ間をねらって収穫し、圃場でしっかり乾燥させることが長期貯蔵させるためのポイントです。

←機能性成分ケルセチンを従来品種より多く含み、長期貯蔵も可能な「ケルたま」。加熱調理することで甘みが一段と際立つ。

「スパート」でタマネギの一番出荷に挑戦

早期出荷には「スパート」をおすすめします。４月中下旬から収穫ができ、甲高でそろいのよい大玉に仕上がります。育苗時から生育が旺盛であること、抽苔や分球の発生が少ないこと、また冬の寒さに対しても葉が傷みにくいことから、適応性が広くどのような天候の年でも安心して作りやすい品種です。

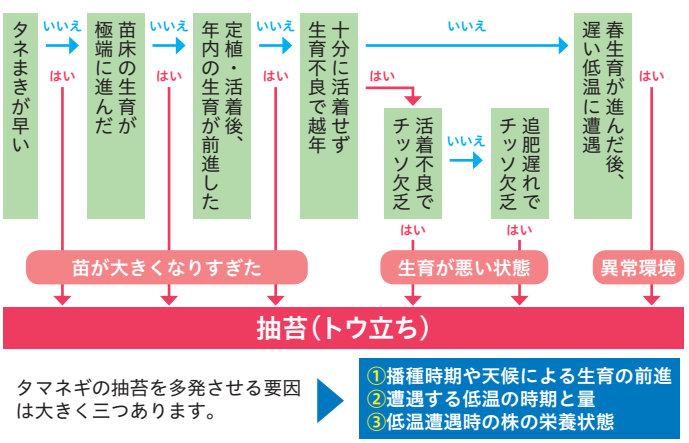
→生育旺盛で作りやすい極早生種「スパート」。

抽苔（トウ立ち）を防ぐには

タマネギはグリーンプラントバーナリゼーション型といわれ、一定の大きさに達した苗が低温に一定期間あうことで花芽を形成し、日が長くなるにつれて抽苔が促進される野菜です。

抽苔を防ぐには植え付ける苗の大きさを直径５～６㎜（鉛筆の太さ程度）にすることがポイントになります。大苗を定植すると抽苔や分球を生じやすくなります。逆に、小苗になると肥大が悪くなり収量が低下することにも気をつけなければなりません。

まずは栽培する品種、作型を確認し、それに応じた適期播種を心掛けます。チェックシートを用意しました。ご自分で設問に答えながら原因を探ってみましょう。



タマネギの抽苔を多発させる要因は大きく三つあります。

①播種時期や天候による生育の前進
②遭遇する低温の時期と量
③低温遭遇時の株の栄養状態

売上アップのための
直売所出荷ワークショップ

workshop

切り花を出荷するなら

葉牡丹「F1フレア」シリーズ

タキイ研究農場　前田（まえだ）　裕行（ひろゆき）

いかに葉牡丹の概念を崩すか、このテーマのもとに開発されたのが、「F1フレア」シリーズです。品種名の「フレア」は、葉の波打つ形状がやわらかなフレアスカートのシルエットをイメージさせることから命名されました。

従来種に比べ生育旺盛で草丈も伸びやすく、着色後も葉の枚数が増加します。8月中旬播種でも切り花として利用可能です。そのままでも、また染色剤（色水）を吸わせて人工的に着色するカラーリングにも適していますので一気にアレンジメントの幅が広がります。

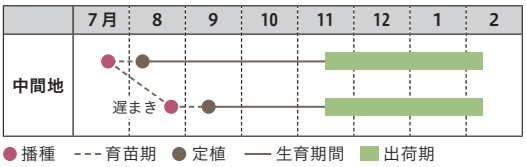
品種特性

「フレアホワイト」は葉の中心部に色みが入らない純白色の品種です。外葉は丸葉で着色部の葉はウェーブがかかります。外葉を外して純白部のみにすると、これまでの葉牡丹とは異なり「ばら」のようにも使うことができます。

「フレアローズ」は淡い桃色地に濃い桃色の葉脈が入った品種です。アンティーク調の色合いで、ホワイトに比べやや開帳型の草姿です。

↑F1フレアホワイト

↑F1フレアローズ



栽培基礎講座

タネまき

7月中下旬～8月中旬播種、200穴トレイに1粒まきにします。発芽適温は20～25℃で2～3日で発芽します。

育苗

発芽がそろったら、しおれない程度に潅水は控え、日当たりと風通しのよい場所で徒長させないように管理します。徒長苗を軽減する目的で播種後5～7日目（本葉展開時）に矮化剤（わいかざい）「ビーナイン顆粒水溶剤」300倍液を噴霧器で全体にかかるように散布します。

定植

定植は日当たりと排水のよい場所を選びます。過湿になりやすい場所では、高畝にするなどの工夫をします。施肥量は土壌条件で異なりますが、速効性の肥料を10㎡（ほ）当たりチッソ成分で80g程度施用します。圃場に残肥が多い場合は無肥料にします。

播種後20日前後で、本葉3～4枚が定植適期になります。定植は遅れないように注意し、日差しの強い日中を避けて行います。茎が真っすぐになるように植え付け、子葉が土に埋め込まれない程度にやや深植えにし、倒れないよう株元を軽く押さえます。

定植間隔はあらかじめ畝に張った、12×12㎝または10×10㎝のフラワーネットのマス目に1～2本植えとします。

定植後の栽培管理

潅水は活着まで十分に行い、茎の伸長を促します。植物体の伸長に合わせてフラワーネットをこまめに上げていき、茎が曲がらないようにします。

茎の太りすぎや大葉になるのを防ぐため、草丈30㎝ごろから葉かきをします。目安としては、草丈の3分の1程度の葉を残し、下部の葉はすべてとります。葉かきは、葉柄の元の部分を指ではさみ、横にひねるように折ります。下向きに行うと茎が傷つくので注意します。葉柄の根本が残りますが、自然に落ちていきます。この時期までに、茎が太く葉が大きくなるようであれば元肥の量が多いと考えられ、早めに葉かきし草勢を抑えます。順次3～4回ほど、生育に合わせて葉かきし、茎の伸長と太さを調整します。

出荷調製

葉牡丹は気温が低くなると着色します。最低気温が12～13℃になり、1カ月ほど経過してから着色します。収穫の1週間前に最終の葉かきを行い、外葉を6～8枚残して草姿を整えます。

肥培管理

生育のイメージは初期（8月）～中期（10月）までに草丈、葉数を十分に確保します。後半（11～12月）は着色不良や色戻りを避けるために肥料を抑え、着色後は、草勢を維持する程度の肥培管理にとどめます。

染色剤でカラーリング

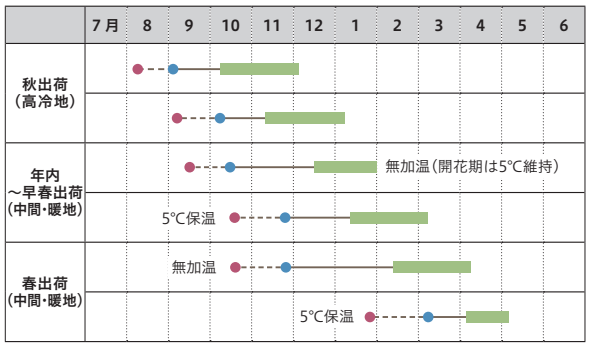
染め方はいたって簡単。切り花を染色液（色水）に切り口がつかる程度につけます。着色部の中心に色がにじんできたら染色液から出し水に切り替えて水上げします。長くつけすぎると色合いが濃くなりすぎます。お好みに合わせて吸い上げ時間を調節してください。

↑「フレアホワイト」（左）のカラーリングではカラフルな色合いを、「フレアローズ」（右）ではシックな大人の味わいを楽しめます。

売上アップのための
直売所出荷ワークショップ
workshop
鉢花を出荷するなら
リナリア「フィリア」シリーズ

タキイ長野研究農場　田中（たなか）　秀典（ひでのり）

植物名：リナリア
学　名：*Linaria maroccana*
原産地：地中海沿岸、モロッコ
用　土：壌土・砂壌土
草　丈：20～25cm
株張り：15～20cm
生育条件：日光／日当たりのよい場所
土壌／適湿
耐暑性／中～弱
耐寒性／中
栽培メモ：9cmポット1株植え～12cmポット・鉢に複数本植えがおすすめ



ヒメキンギョソウと呼ばれるリナリアはその名のとおりキンギョに似た小さくかわいい花を咲かせる秋まき一年草で、早春の花壇を彩る草花です。

今回は生育が早い極矮性（わい）種の「フィリア」シリーズをご紹介します。「フィリア」は花色が5色で、草丈は約15～20cmとコンパクトにまとまり、基部分枝にすぐれるのが特長です。凍らない程度の温度管理で晩秋から早春まで出荷できる省力の品種です。単色だけでなく、複数の色を混植してより彩りのある花苗を直売所に出荷されてはいかがでしょうか。

↑「フィリア」シリーズは基部分枝にすぐれるので、たくさんの花を咲かせこんもりと形よくまとまった草姿になる。

品種特性

従来品種よりも1週間程度開花が早く、栽培期間が短縮でき、春先から出荷が可能です。短節間なので矮化剤なしでも草丈20cmとコンパクトにまとまり、分枝も旺盛なのでポットや鉢を覆うように生育します。

越冬するとさらにボリュームのあるこんもりした株になり、花を咲かせ続けます。

ホワイト

イエロー

ピンク

バイオレット

ローズ

栽培基礎講座

播種

早春の2～4月に出荷する場合は10～11月に播種します。また晩秋の10～11月出荷では8～9月の播種が目安です。288穴のプラグトレイに3～5粒まきしますが、好光性種子なので覆土はしないか種子が隠れる程度に薄く行います。発芽の温度は15～20℃で、7～10日で発芽します。

ポット上げ

植え替えの目安は播種後3～4週で、本葉4～6枚程度のときに行います。春出荷は低温期間の栽培で株が充実し分枝も確保できますので、ポット苗出荷に向きます。9cmポットに1株植えをおすすめします。秋出荷では高温期の栽培になり株が小さくなりやすいので、間引きせずに複数本のままで、10・5～12cmポットに植えてボリュームを出して出荷してはいかがでしょうか。

栽培管理

リナリアは高温・過湿に弱いので、日中の湿度を下げるために換気してください。また株間を広げ、株に十分な光を当てることで徒長を防ぎます。肥料切れを起こすと葉の色が薄くなりますので、週に1回の液肥もしくは固形肥料の追肥を行いましょう。チッソの与えすぎはうどんこ病の発生につながりますので注意します。

病害対策

高温多湿条件はうどんこ病が発生しやすくなるので、発生前から予防的に殺菌剤を散布するか、空気が停滞しないよう換気するようにしましょう。

出荷

分枝した枝のうち2～3本開花した状態で出荷します。

フィリアの早生性と分枝性を利用し、活着後本葉4～6枚程度で摘芯することで2週間程度開花を遅らせ、さらに分枝を多くすることもできます。

播種時に種子を混ぜて複粒まきすることで混色仕立てにすることもできますので、彩り豊かな苗を出荷してみてください。